

日本から見たイスラーム

2021年8月末をもって、アメリカ軍がアフガニスタンから撤退した。この報道を受け、マスメディアでは、連日のようにイスラーム（イスラム教）やムスリム（イスラム教徒）の語が登場している。イスラームに関するニュースは、自爆テロ、女性の抑圧、人質殺害など否定的な話題が多い。そのため、イスラームに対する恐怖、すなわちイスラモフォビア（Islamofobia）を植え付けがちである。

しかし、今や世界人口の5人に1人はムスリムであると言われている。日本では、コロナ禍にあっても外国人技能実習生を受け入れており。そのなかには、人口の約9割がムスリムであるインドネシアからの技能実習生もいる。私たちにとって、イスラームを信仰する人々は決して遠い存在ではない。そこで、今回はイスラームを信仰という視点から取り上げる。

イスラームの意味

「イスラーム」(Islām)とは「神に帰依すること」を意味する。「ムスリム」(Muslim)とは能動形で「神に帰依する者」を意味する。これらの語には、「S-L-M」の語が含まれているが、これを語根と呼ぶ。アラビア語は、この語根の前後に母音を付けてさまざまな意味の言葉を生み出す。たとえば、「サラーム」(Salām)というアラビア語には、「平安」や「平和」という意味がある。

ムスリム同士の挨拶である「アッサラーム・アライクム」は、「平安があなたのうえにありますように」という意味であり、「こんにちは」に近い感覚で用いられる。したがって、「平安」を意味するサラームとイスラームの語は、同じ語根から成る。そのため、「イスラームは平和と尊ぶ宗教である」という説明が生まれることになった。

信仰とは行為か意識か？

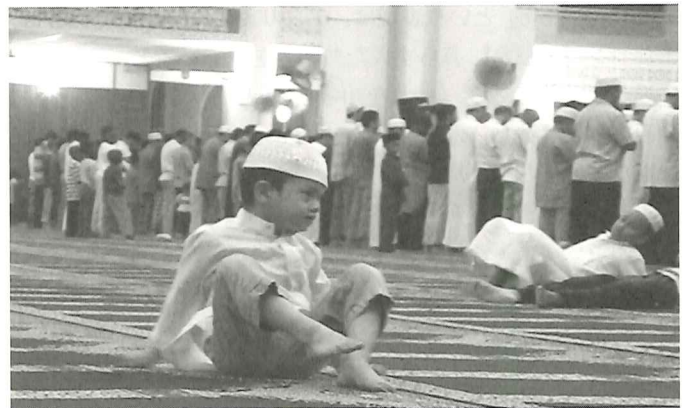
イスラームでは、初期の時代から「信仰」(イマーン imān)をめぐる議論が盛んに行われてきた。「信仰とは何か？」という問いは、神に受け取ってもらえる信仰的な行為とは何かという問いでもある。信仰について突き詰めて考えることは、日常の行動規範について突き詰めて考えることなのである。

そのため、日常生活の一挙手一投足に到るまで、どのように過ごすかが議論となる。イスラーム神学において、信仰をめぐる議論は、意識よりも行為に基づいて思索が深められてきた。すなわち、信仰心について問う前に信仰に基づく行為が議論の焦点となったのである<sup>(1)</sup>。この行為を、アラビア語で「アマル」と呼ぶ。日本語の「形(型)から入る」という表現に近いように思われる。

自らが礼拝したかが重要

ムスリムが、1日5回の礼拝が信仰的義務であることはよく知られている。それでは、正しく礼拝したとはどういう状況を指すのか。礼拝前の所作として、身体を浄める作業(ウドゥー)がある。さらに、服装を整えたうえで礼拝を行う。

礼拝は直立礼の姿勢から屈折礼、平伏礼、座礼を1サイクルとして、それを決められた数サイクル行う。これを「ラクア」と呼ぶ。ムスリムが集団で礼拝する場合、イマーム(礼拝の中心となる者)



礼拝中に遊ぶ子どもたち  
(マレーシア 2001年筆者撮影)

の合図に従って礼拝をする。特にモスクで行う礼拝時刻は時刻が決められている。しかし、間に合わなかったり遅れてきたりする場合もあれば、近くにモスクがない場合もある。

モスクからの礼拝の呼びかけ(アザーン)を聞いた者は、モスクに赴いて礼拝しなければならないと言われている。集団での礼拝に遅れた場合、礼拝後に自分が行っていない分を補うかたちで礼拝する。また一人でする場合でも、定められたサイクル分の礼拝を行う。ここで重要なのは、集団で礼拝することよりもむしろ、自らが礼拝を行ったかどうかである。

信仰に対する意識の高まり

イスラームへ改宗するには、成人男性のムスリム2人の前で信仰告白(シャハーダ)を行う必要がある。信仰告白の内容は、「私は、アッラーのほかには神はいないことを証言します。私は、ムハンマドが神の使徒であることを証言します」を、アラビア語で2度宣誓するというものである。

礼拝のたびに、ムスリムは信仰告白の文言を口に出し、信仰対象である神への誓いを確認し、自らの救済を願う。ここで言う救済とは、現世における救い(直面する困難から抜け出すこと)と来世における救い(天国へ行くこと)である。もちろん、状況に応じて、苦しむ他者の救済についても神に願う。そのため、現在、コロナ禍に苦しむ人々に対する救済の祈りをはじめ、同胞であるムスリムの死に対しては、天国へと安らかに導かれるように祈る。信仰意識が高まるにつれて、日常の言動についての意味づけも深まっていく。

ムスリムとしての信仰的義務が課されるのは、一般的に、男性であれば精通、女性であれば初潮を迎え、肉体的な成熟期を迎えてからである。それは、身体的な成熟によって論理的な判断能力が備わったとみなされるためである。この頃から、ラマダーン月における断食も行うようになる。

日常の行為を通して、子どもは一人前のムスリムとして信仰心が内面化される。それとともに、身体の成長と同時に、ムスリムとして心も成長していくのである。

[参考文献]

- (1) Toshihiko Izutsu, *The Concept of Belief in Islamic Theology: A Semantic Analysis of Īmān and Islām*, Tokyo: Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965 (鎌田繁監訳・仁子寿晴・橋爪烈訳、『イスラーム神学における信の構造』、慶應義塾大学出版会、2018年)。